

降臨節第4主日 ルカ1章26―38節

〔新共同訳〕

26 六か月目に、天使ガブリエルは、ナザレというガリラヤの町に神から遣わされた。27 ダビデ家のヨセフという人のいいなずけであるおとめのところに遣わされたのである。そのおとめの名はマリアといった。28 天使は、彼女のところに来て言った。「おめでどう、恵まれた方。主があなたと共におられる。」29 マリアはこの言葉に戸惑い、いったいこの挨拶は何のことかと考え込んだ。

30 すると、天使は言った。「マリア、恐れることはない。あなたは神から恵みをいただいた。31 あなたは身ごもって男の子を産むが、その子をイエスと名付けなさい。32 その子は偉大な人になり、いと高き方の子と言われる。神である主は、彼に父ダビデの王座をくださる。33 彼は永遠にヤコブの家を治め、その支配は終わることがない。」34 マリアは天使に言った。「どうして、そのようなことがありえますようか。わたしは男の人を知りませんのに。」

35 天使は答えた。「聖霊があなたに降り、いと高き方の力があなたを包む。だから、生まれる子は聖なる者、神の子と呼ばれる。36 あなたの親類のエリサベトも、年をとっているが、男の子を身ごもっている。不妊の女と言われていたのに、もう六か月になっている。37 神にできないことは何一つない。」38 マリアは言った。「わたしは主のはしためです。お言葉どおり、この身に成りますように。」そこで、天使は去って行った。

①全体の構成

天使の言葉とマリアの反応が三回繰り返される形で展開する。

①a 第一段落（26―29節）

ガリラヤの町ナザレに住むマリアに天使ガブリエルが現れ、「おめでどう」と語りかける。「おめでどう」の直訳は「喜べ」。これは「こんにちわ・ようこそ」というように挨拶の言葉としても用いられるが、ここでは文字通り「喜べ」という意味かもしれない。「恵まれた方」は「恵みを与える（授ける）」という動詞の完了受動分詞。「魅力ある・深く愛された・神の恵みがある」という意味。「恵み」は、「魅力ある性質及び（もしくは）寛大さ」、「神の恩寵」、「神が与える無償の賜物としての恵み」のいずれかの意味である。ここでは固有名詞が欠けているので、「恵まれた方」はその代わりと考えられる。この挨拶はマリアを戸惑わせ、「この挨拶はどんな類であるか」と考え込ませる。動詞「であるか」は希求法（希望や願望、あるいは可能性を述べるときの動詞形）である。

①b 第二段落（30―34節）

考え込んだマリアに天使が告げた言葉は、第二段落から第三段落にかけて、次のように展開する。

a あなたは「神から」の恵みを受けているから、恐れるなと呼びかける。  
b イエスの誕生を告知して、「見よ、あなたは身ごもるだろう」と告げる。  
c 彼は偉大で、「いと高き方の子と呼ばれるだろう」、

d そして「主なる神が」彼にダビデの座を与えると約束する。

e 彼は永遠にヤコブの家を治め、その支配は終わることがない。

d' 聖なる霊がマリアに降り、「いと高き方」の力が包むから、

c' 生まれる者は「神の子と呼ばれるだろう」。

b' 不妊の女と呼ばれたエリサベトも「見よ、身ごもった」ように、

a' 「神から」の言葉は必ず成就する。

a から e の告知を受けたマリアは、「どうしてこれがあるだろう」と答える。動詞「あるだろう」は直説法未来形である。

### © 第三段落 (35—38 節)

未来へと目を向け始めたマリアに天使は、告知の確かさを示すしを述べる。第二段落の a から d までの表現が第三段落では逆の順序で現れ、対応している。第二・第三段落での天使の言葉は、e となる 33 節を中心として、外側から内側に向けてそれぞれ対応する四つの層が構成になっている。天使の言葉の中心は、マリアから生まれる子が永遠に支配するということにある。しるしを告げられたマリアは「あなたの言葉に従って、私になるように」と答える。動詞「なるように」は希求法であり、願望を表す。熟慮の上での願望を表す、マタイ 6 章 10 節「あなたの意思がなれ」（命令法）よりも微妙な表現である。

### ② 神の言葉のとおり起こることを願う

#### ① a マリアは考え込んだ (26—29 節)

天使ガブリエルが「喜べ、恵まれた女よ、主があなたと共に」と挨拶したとき、マリアは戸惑い、「考え込んだ」。動詞「考え込んだ」は、心に疑惑が生じて「考え込む・不思議に思う」の意味だが、3 章 15 節ではメシアを待望する民衆に使われている。

民衆はメシアを待ち望んでいて、ヨハネについて、もしかしたら彼がメシアではないかと、皆心の中で考えていた。

3 章 15 節でも、29 節と同様に、希求法の動詞が一緒に用いられていることを考えると、マリアはただ困惑や疑惑だけに満たされたのではなく、救いの出来事への希望をも抱いていたと見ることができる。しかも「考え込んだ」は動作の継続を表す未完了形で書かれている。マリアはわずかであっても希望を持ちながら、ずっと考え込んでいる。ここでの希求法は間接疑問文として、「(この挨拶はどのようなもので) あるか」の意味。もしくは、思索に用いられて可能性を表す希求法であり、この場合は「(…:どのようなか) あるのだろうか」の意味になる。

⑥ どうしてこれがあるだろう (30—34節)

この段落と次の段落の天使の言葉だけを抜き出すと、33節を中心 (e) として、それを四つの対応する層 (a から d と d' から a') が外側から順に囲い込む構成が浮き出て来る。この第二段落では、a から d によって子どもの誕生が告げられ、中心部 e ではその子どもの支配が永遠に続くことが約束される。

⑦ 30節 (a)

恐れるな、 マリア、  
なぜなら あなたは見いだした 恵みを 神から。

天使は考え込んでいるマリアに答えて、「それ以上恐れるな」と告げる。なぜなら、マリアは「神から」の恵みを見いだしたからである。

⑧ 31節 (b)

この「神から」の恵みはマリアの身ごもりを通して現れる。「あなたは身ごもるだろう」、息子を「あなたは生むだろう」、彼の名をイエスと「あなたは呼ぶだろう」。この三つの動詞で出来事の展開を表すと共に、恵みの源泉であるイエスの存在に焦点を合わせてゆく。

⑨ 32節前半 (c)

主語が「あなた」から「彼 (イエス)」に代わる。イエスは「いと高き方の子と呼ばれるだろう」。彼を通して、神の恵みが人々に注がれるからである。

⑩ 32節後半 (d)

罪による闇を吹き払うために、「主なる神」が介入し、イエスにダビデの座を与え、メシアとするからである。

⑪ 33節 (e)

天使の言葉の中心である。誕生するイエスは王として支配するようになり、しかも、その支配は永遠に続く。その支配は独裁者の支配ではなく、理想の王の支配であるから、イエスは「同胞を見下して高ぶることなく」(申一七 20)、「主の御声に聞き従う」(サム上一五 22) ことによって、神と民に仕える。

告知を聞いたマリアは「考え込む」ことを止めて、「どうしてこれがあるだろう」と天使に問いかける。動詞「あるだろう」は直説法未来形の動詞である。マリアはまだ半信半疑である。しかし、29節に述べられた「希望」がいつそう強くなっている。それが直説法未来形の動詞で表されていると考えることもできる。

⑫ あなたの言葉に従って私になるように (35—38節)

この段落では天使の言葉の後半部 (d' から a') が語られ、告知の確かさを示すしるしが明らかにされる。

⑬ 35節前半 (d')

この恵みの出来事を支配するのは神である。ここでは「聖なる霊」は、三位一体の第三位格である聖霊よりもむしろ、神の霊の働きかけを示し、この後の「いと高き方の力」と平行する意味で使われている。マリアに聖なる霊が降り、「いと高き方」の力が彼女を包む。

① 35節後半 (c)

だから、生まれくる子は人々によって「神の子と呼ばれ」、讃えられる。救いの出来事を中心人物は恵みの源泉となるイエスである。マリアはそれに参画し、人々はその恵みにあずかる。人々が口にする称賛もしるしの一つである。

② 36節 (b')

さらに、しるしが加えられ、不妊の女エリサベトも「見よ、身ごもった」と言われる。

③ 37節 (a')

なぜなら、「神から」の言葉は不可能ではないからである。

「神にできないことは何一つない」の直訳は

なぜなら 不可能でないだろう 神から すべての言葉は

となる。ここに用いられた「言葉(レーマ)」は「出来事」の意味にもなる。エリサベトに起こったことは、神の「言葉」が「出来事」であることとしるしである。

希望が次第に高まっていたマリアの内に転換が起こる(38節)。戸惑いは消え、恵みに身を開く。マリアは「見よ、主のはしため」と答える。「はしため」とは、恵み深い主人の憐れみに信頼を置く人のことである。

御覧ください、僕が主人の手に目を注ぎ

はしためが女主人の手に目を注ぐように

わたしたちは、神に、わたしたちの主に目を注ぎ

憐れみを待ちます(詩一二三・二)。

③ 天使の言葉がもたらした喜び

① 喜べ、恵まれた方、主があなたと共に

⑦ 天使がマリアに告げた挨拶には、カイローという動詞が用いられている。カイローは「喜ぶ・嬉しく思う」が基本的な意味で、福音書・使徒言行録では、メシアの誕生を告げる星を見た群衆(マタ二10)、洗者ヨハネの誕生を知った人々(ルカ一14)、イエスの行いや奇跡を見た群衆や弟子たち(ルカ一三17)、失われた羊や息子を見つけた人(ルカ一五・32)、ユダの裏切りを知った祭司長(マコ一四11)、復活した主を見た弟子など(ヨハ二〇20)、喜ばしい出来事に出会った人に使われている。パウロ書簡では、特にキリスト信者の喜びを表し、パウロ自身の喜びを表したり(ロー一六19)、彼が教会に与える勧告にも使われる(「喜んでいなさい」ロー一二12、1テサ五16)。

① もう一つの用法として、カイローは挨拶や(マタ二六49、2ヨハ10)、手紙の書き出しの決ま

り文句にも使われる(使一五23)。28節では命令形が使われており、文脈からわかるように、天使からマリアへの「挨拶」である(29節参照)。

⑥普通に挨拶といえば、人に会ったときに交わす儀礼的な動作や言葉を指すが、聖書の述べる挨拶はそうした日常生活を円滑にする儀礼を超えていることが多い。たとえば、ルカ10章5―6節で、七十二人を宣教に派遣するイエスが

どこかの家に入ったら、まず、『この家に平和があるように』と言いなさい。平和の子がそこにいるなら、あなたがたの願う平和はその人にとどまる。もし、いなければ、その平和はあなたがたに戻ってくる。

と述べているが、ここでの「平和(シヤローム)」はごく日常的な挨拶というよりは、神からの祝福を弟子たちが人々に伝える手だてである。

⑦28節の天使の挨拶も同じである。祝福の言葉(「恵まれた方、主があなたと共におられる」)が続いており、挨拶が神からの祝福であることが示される。挨拶の根元には、神がマリアに与えた「恵み」(カリス、30節)と、そこから沸き上がる「喜び」がある。「恵み」と「喜び」(カライ)は、ギリシア語では同根の言葉である。

⑧「ぜひあなたの家に泊まりたい(あなたの家に留まることになっている)」とイエスに声をかけられたザアカイや(ルカ一九6)、イエスに再会する弟子たちが喜ぶように(ヨハ二〇20)、主が共にいる「恵み」を見つけた者には、大きな「喜び」がある。子の誕生によってそれを見つけたのだから、「喜ばなさい」(カイレ)と天使はマリアを祝福する。

⑨天使がマリアに告げた喜びは、イエスの誕生を通して、民全体の喜びとなる(ルカ二10)。天使が運んだ喜びはマリアを出発点として、すべての人に広げられて行く。だから、パウロは「喜ばなさい」(1テサ五16)と呼びかけることができるのであり、喜びはキリスト者のしるしである。しかし、その喜びは人間が作り出すのではなく、神から来る喜びである。

#### ⑩イエスと呼ぶだろう

①天使は誕生する子どもの名を「イエス」と決めているが、これは命名者が神であり、子どもの誕生には神が働いていることをほめかすためだろう。これを受けて32・35節では、「呼ばれるだろう」と、受動態が使われ、イエスと名付けられた子どもの本質がどこにあるかが表される。彼は「いと高き方の子」「聖なる者」「神の子」である。これらの呼び名が示すように、イエスはイスラエルが待望するメシアである。

②神がダビデの子孫を王とし、その王国の永遠の支配を約束するという旧約聖書の預言は(サム下七12―16)、当時のユダヤ人には、終末のメシアの到来を約束する神の言葉と考えられていた。

12 あなたが生涯を終え、先祖と共に眠るとき、あなたの身から出る子孫に跡を継がせ、その王国を揺るぎないものとする。13 この者がわたしの名のために家を建て、わたしは彼の王国の王座をとしえに堅く据える。14 わたしは彼の父となり、彼はわたしの子となる。彼が過ちを犯すときは、人間の杖、人の子らの鞭をもって彼を懲らしめよう。15 わたしは慈しみを彼から取り去りはしない。あなたの前から退けたサウルから慈しみを取り

去ったが、そのようなことはしない。16 あなたの家、あなたの王国は、あなたの行く手にとこしえに続き、あなたの王座はとこしえに堅く据えられる。

イエスの誕生は、この神の言葉を成就させる。ザカリアが賛歌で歌うように、イエスの誕生は今や神が救いの角を起こされたこととしるしである。

我らのために救いの角を、

僕ダビデの家から起こされた。

昔から聖なる預言者たちの口を通して

語られたとおりに（ルカ1—69—70）。

#### ④神の言葉を追いかけるマリア

① マリアは「喜べ」という天使の言葉に戸惑い、考え込んだ。「この挨拶はどんな類であるか」と問い、どのような意味があるのかとマリアは考え続ける。天使の言葉の意味を理解できないとしても、その意味を問い続けることによって、マリアは次第に天使の言葉が現実となる可能性へと目を向けていく。

② 考え込むことを止めたマリアは、「どうしてこれがあるだろう」と天使に問いかける。動詞は最初の問いの希求法から、直説法未来形に変わる。「この挨拶はどんな類であるか」と問う際に持っていた「希望」は、子どもの誕生を告げる天使の言葉を聞き、しだいに強くなっていく。自分のあり様を見つめ、その力は自分ではないことを知っているマリアの視線は、神の言葉に向かう。マリアは問い続けるが、もはや問いは自分の内側に留まらず、天使へと向けられる。問いの答えは自分の外に、神にあることに気づいたからである。

③ さらに天使が告知の確かを示すしるしを語ると、マリアは問うことをやめる。「見よ、主のはしため」というマリアの答えは、神の言葉への信頼を示している。女主人の憐れみを信じて待つはしためのように、マリアも主のはしめとして神の憐れみを待つことを告げる。神の憐れみは、永遠に支配する王としてイエスを人々に与える。マリアは自分が身ごもる子どもによって、神と民に仕える王の支配、終わることのない支配が来ることを信じて待つ。

④ そしてついにマリアは「あなたの言葉に従って、私になるように」と願う。神の言葉が出来事となって現れることを信じる信仰がマリアによって語られている。自分の理解を超える言葉を与えられたマリアは、「どんな類か」と自問することから始め、「どうして」と言っ、その言葉の可能性はどこから来るかを問う。問い続けることを通して、神の言葉が現実となることへの希望と喜びを語る者となる。

⑤ マリアは「神から恵みを受けた方」と呼ばれる。天使の言葉に対するマリアの応答を通して分かることは、神の恵みを受けて生きるとは、迷うことなく信じることではないということである。むしろ、恵みを受けた者は、今は理解できない神の言葉の意味を問い続ける。問うことは、いつか神の言葉の真意を知ると信じることであり、その意味が明らかにされるといふ希望を持ち続けることである。